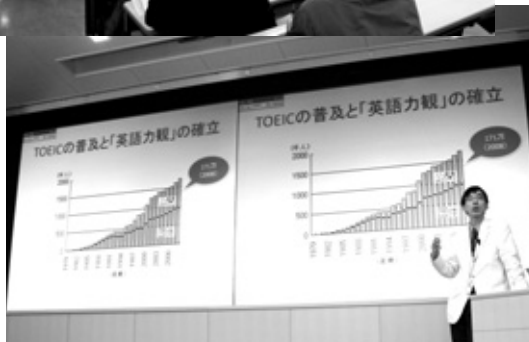


TOEIC® Newsletter

特集 シンポジウム 大学英語教育とTOEIC®テスト —どう使うかどう活かすか—

(財)国際ビジネスコミュニケーション協会では、2010年3月21日、キャンパスプラザ京都において、神戸大学石川慎一郎研究室と共催で、シンポジウム「大学英語教育とTOEICテスト—どう使うかどう活かすか—」を開催いたしました。

当日は、石川先生を中心とする研究グループによるプロジェクト「英語4技能直接測定の意義と課題」の成果発表や、TOEICスコアを取り入れた教育プログラムで成果を出している大学の事例発表などが行われました。今号では、同シンポジウムにおける研究プロジェクト成果発表と招待発表事例をダイジェストでご紹介します。



CONTENTS

特集

シンポジウム

「大学英語教育とTOEICテスト—どう使うかどう活かすか—」

<研究プロジェクト成果発表>

- 石川慎一郎先生(神戸大学) 3
- 石川有香先生(名古屋工業大学) 6
- 小泉利恵先生(常磐大学) 8

<招待発表>

- 伊東田恵先生(豊田工業大学) 10
- 前田啓朗先生(広島大学) 12
- 植松茂男先生(摂南大学) 14

<IIBCプレゼンテーション>

- (財)国際ビジネスコミュニケーション協会 R&D部 三橋峰夫 16

- [Information] From TOEIC 19

招待発表

TOEIC®スコア900点以上、 英検1級合格を可能にする英語教育： 摂南大学のケース

植松茂男先生 (摂南大学)

学部改組に伴い英語教育改革に着手 TOEIC600点突破を目指す教育を実践

本学では、2005年度に国際言語文化学部を改組し、外国語学部を開設しました。それに伴い、英語専攻学生の英語力をアップするための諸改革に取り組んできました。その概要と実施結果についてTOEICスコアなどを用いてご紹介いたします。

はじめに改革前の状況ですが、教室会議が少なく、教員同士のコミュニケーションがあまりとれていない状況でした。授業は1クラス40～70人程度、多様なレベルの学生が混在している中で行われ、授業方法は教員によって異なっていました。

また、外国語教育に必要なマルチメディア機材等のインフラも貧弱で、英語関係のアクティビティも十分ではありませんでした。さらに、学生の英語力やその伸びを把握する手段としての標準化テストの活用もなされていませんでした。

これらを踏まえて、次の改革を進めました。

●習熟度別・少人数クラスの導入

入学時にプレACEMENTテストを実施して1クラス40人以下（英会話クラスは20人以下）のレベル別クラスに編成するようにしました。

●語学インフラの整備

4つのCALL教室、マルチメディア機材を備えた語学ゼミ室、ドラマスタジオを作りました。

●英語カリキュラムの見直し

新カリキュラムでは必修科目を3年次まで設け、基本4技能をバランスよく育成するように構成しています。特に1年次では、4技能を総合的に高めることを意図したSkills Trainingを中心に据え、中高の英語の復習を意図したFreshman



EnglishやGrammarなども配置するようにしました。また、選択科目はEnglish Presentation、Drama、Topic Studies、Debateなど英語発信力の育成や、英語による授業の充実を念頭においた編成としました。Topic Studiesは、教員が自由な授業テーマを選んで英語で講義することを原則とし、「外国語学習と年齢の関係」など、多彩なテーマで3年次まで半期科目として展開しています。今後も学生や社会のニーズに対応して、テーマを変え進化し続ける「先進的」な科目ではないかと思います。

●授業改善の取り組み

Topic Studiesや少人数ゼミではできるだけ英語を使って教えるようにしました。クラスのレベルによっては、例えば最初は日本語7：英語3の割合から始めるなど、次第に英語の比率を増やすようにしています。また、語彙力をつけるため毎回の授業では、前回既習事項のチェックテストを実施してもらるようにしました。

●多読の取り組みの導入

図書館の協力も得て、専用のコーナーを設置し、

毎年「多読マラソン」を実施。学期ごとに優秀者は表彰され、賞品も授与されます。

●e-learningの導入

自宅からもアクセスできるようにし、レベル別に細かく編成されたプログラムを入学前から1年次修了まで利用できるようにしています。1年次ではe-learningの進捗状況を特定英語科目の成績に30%の割合で入れるようにしました。

●留学制度の充実

従来アメリカへの夏期短期海外実習中心だったのを長期留学（半年、1年）プログラムも充実させ、提携校もオーストラリア、イギリス、カナダ、ニュージーランドなどへ順次拡大していきました。さらに長期留学中は本学の授業料を免除する制度を、大学の理解により実現しました。

●英語関連アクティビティの導入

ボキャブラリーコンテスト、スピーチコンテスト等を定期的で開催し、イングリッシュキャンプ、イングリッシュパーティーなどの行事も充実させました。さらに、一般参加も募る英語教育フォーラム、ドラマ・中学生ワークショップなどの各種英語教育イベントも毎年開催しています。

●奨励金制度の開始

TOEIC800点以上のスコア提出者には大学から10万円を授与しています。2009年度は17人が申請しました。

●TOEICの恒常的導入

年2回学部で実施し、英語を専攻とする学生は受験を必須としています。スコアによって次年度の習熟度のクラスが決まる仕組みとしています。大学が主催するTOEICテストも含めると年5回受験可能な環境となっています。また、TOEICスコアによる目標値も決めました。2年進級時400点、3年進級時500点、4年進級時600点です。

習熟度別クラス、英語による授業などが英語力向上の大きな要因

こうした取り組みの結果、外国語学部のTOEICスコア（2008年7月・学部事務室集計）は、1年生328点（受験者数193人）、2年生392点（英語コース受験者数175人）、3年生466点（英語コース受験者数115人）、4年生602点（受験者数24人）と

なり、学年ごとに70点程度のスコアアップが見られます（※外国語学部では2年次からコース所属、4年次は希望者のみ受験）。また、2006年度入学生の追跡調査で、2009年度までの目標値を達成した人数とその平均スコアを見ると、2年次の目標スコア400点の達成者は97人で平均スコアは475点です。3年次の500点達成者は54人で平均680点、4年次の600点達成者は21人で平均775点です。多くの学生が、飛躍的な伸びを見せ、2008年度に900点台が出て、2009年12月時点の累計では、900点台4人、700点以上が62人となっています。

こうした成果の要因として、習熟度別クラス編成やクラスサイズの縮小、英語カリキュラム・学習環境の見直しが大きいのと考えられます。特に英語による授業やCALL等の学習環境改善によって、留学しなくても英語力が伸びる可能性が大いにあるのではないかと思います。加えて、マルチメディア機材を利用し、時事ニュース等のオーセンティックなコンテンツを使った授業、スタジオで体を動かして行う英語授業などが展開できることも、結果につながっていると感じています。

本学は各種大学GP等で何か特別なことをしたわけではありません。教員・スタッフが丸丸となって学生の英語力の向上に向かって努力した結果です。そのことから、教員間のコミュニケーション・コンセンサスは大切であると考えます。

また、学生の英語力を高めるには、先に述べた留学制度の充実、TOEIC等の受験義務化、e-learning等の成績評価への組み込みのほか、TOEIC奨励金や留学時の授業料軽減措置、留学先での努力を反映させる単位認定など、分かりやすいインセンティブを学生に与えることが肝要です。一方で「TOEICは体重計」という自覚をもたせ、定期的な受験させることはもちろん、普段からあらゆるジャンルのテキストを読ませることが大事です。

最後になりますが、こうした実践を通して、高校時代に英語が苦手な学生でも大学で成績を大きく伸ばすことが分かりました。いったん本気になると学び始めると、その伸び幅は驚くほどです。こうした才能開発のために、学生の能力を信じて教育することがこれからの教員の使命ではないでしょうか。大学からでも英語力が伸びることを、学生に体感させながら学ばせる工夫が英語力向上には非常に大切であると感じています。